

万葉集の文芸学的研究法

日本大学教授
日本学術会議会員

高木市之助

お暑い時ですからなるべく暑くないお話と思ひますが、与へられた問題が問題ですから多少暑苦しくなる虞れはあると思ひます。おゆるしを願ひます。

私の与へられました題は文芸学的方法といふのです。

ところでこの文芸学的方法といふ言葉ですが、皆様が文芸学的方法といふ言葉で御期待になり、或ひは御想像になつてゐること、私のお話しようとする事との間には大きなずれがあるのではないかといふことを虞れてもをりますが、だからこそお話をする気にもなつたのです。

と申しますのは文芸学的方法と申しますと、何か万葉に於いての美のお話、万葉美といふやうな、私ついでの間創元社の講座でも頂戴した課題でありましたが、幾つかの美の中の一つを担当させられて素朴美といふお話を書いたのですが、万葉集、或ひは文芸一般に及ぼしますならば一般文芸の美的な面を大きく取上げる、或ひはそこに重点を置いて考へて行

くのが文芸学的方法だといふやうなふうに御想像になつてゐらつしやるんぢやないかと思ひます。

併し私の考へるところでは文芸学的方法といふものはさういふものであつてはならないのです。

今、美学的方法、美の問題を扱ふといふことを申し上げましたが、これは万葉集における、と仮りに制限を付けますが、万葉集においてどういふ美が表現されてゐるか、或ひは創造されてゐるか、かういふ問題になるのであります。併し今文芸学的方法からさういふ美学的な方法を締出さうとしてをるにも拘はらず、さういふ方法が詰らないとか、意味がないとか申上げてをると誤解して頂いては困るので美学的方法の存在理由は勿論ある。ただ美学的方法といふのは美を求めて行く方法、或ひは万葉における美とは何だ、かう考へて行く、さういふ方法でいはずば普遍妥当な美を持つて来て、そのやうな普遍妥当な美といふ一つの理念、その万葉集における関連を考へて行くことなのであり、又さういふことでしかない。

それは美といふものが一つの理念としてわれわれの文化、或ひはわれわれの生活を規定してをる限りにおいて大きな意味を持つてゐることでありませう。美学といふ學問が今日大きな學の体系の中で一つの役割を演じてをるといふことが肯定される以上は、さうした美といふものをわれわれは求めて行く學問的當みが当然存在の理由を持つてゐることに疑ひはない。けれども文芸といふものが文芸といふ一つの文化であらうといふ考へ方からいたしますと文芸即美であるかどうか、ここに大きな問題がある。もし文芸が即美であるといふ前提の下に考へますならば、美學的な方法といふものはそのまま文藝學的方法であつてよいわけですが、文芸といふしろものを、われわれの持つてゐる、一つの文化として、或ひは一つの生活として肯定いたしますならば、それがそのまま美に直結して美が即ち文芸であり、文芸が即ち美であるといふふうには考へられない筈であります。美は一つの理念であり觀念でありますが、文芸は一つの具體的なものである。具體的なものが理念であるといふこと、それは形式論理的に考へても矛盾でありましてさういふことはあり得ない、文藝の中からわれわれが美を抽象して来て美とはどういふことだと考へることは許されもし、必要でもあるだらうと想像いたしますけれども、併しながらそれ故に美を考へて行くことが文藝學的方法であるといふ、いはば常識的な考へ方はどうしても私としてはそのまま承服できないことなのであります。

そこでそれでは文芸といふものが、美のやうな理念的なものでないとすればどういふものであるか。かういふ問題に入つて行かなければならないと思ひますが、この問題については私は實はいろいろな所でお話もし、又かといふお叱りや或ひは少数のお聴きになつてをる方の中から受けるのではないかと思ひますし、私としては余り繰返したくない。ですから極めて結論的なことだけを申し上げますと、文芸といふものは人間の生産したものでありまして、どこまでも人間的なものであり、それは哲學なり、宗教なり、政治、經濟、その他さまざまな文化があります中に、それらとは全くちがつた、そしてそれらに対して發言權を持つてゐる別の第何番目かの文化である。それが芸術といふものの根本的な定義であり、存在の意味であります。でありますからさういふものをわれわれはどうしても、哲學とか宗教とかいふものから引離さなければならぬ。文學は如何に哲學でないか、如何に宗教でないか、如何に道徳でないか、如何に政治でないか、と考へて行くところに文學、文芸といふ一つの藝術が占めてゐる位置がある。もつとも、文芸といふものがこの社会に必要なものの、無用の長物であるといふ考へ方を許すならば、私のこれからのお話はすべて雲霧散してしまひます。私のお話はずから一つの大前提の上に立つてをる。即ち文學は文化社会において必要な何物かである、存在理由のある何物かであり、現実に存在してゐる何物かである。かういふことを一つ

の前提として考へた上のお話なのであります。

そこでそれでは文芸といふものが他の諸文化に対してどういふ存在理由を持つてゐるかといふお話であります。そこが問題でありまして、そこがたびたび私の繰返してゐるところであります。要するにそれは文芸論者よりも哲学者の方で余程詳しく考へてゐてくれるのであります。それは構想力による或るまことに総合的人間的な所産でありまして、もつと申しますならばつまり私共人間の二元的なもの、例へば感情と智性、考へることと行動と、或ひはロゴスとパトスといふやうな、さういふ二つの、二元的に分裂する方向を持つております。それであらゆる抽象された文化といふものはその二つの中のどちらかに属してゐる。哲学は考へる世界に属してゐるが、道徳は行動の世界に属してゐる。その二元的に分裂しようとするものを人間が一元化して、総合統一された人間的文化、人間的存在を可能ならしめるものがどこかになければならぬ、それが文芸である。広くいへばそれが芸術である。構想力といふものがさういふ意味において形を作る。人間が創造し得るものはただ形であり、形以外に何物もないといはれてをりますが、さういふ意味の二つを一元化してゐるのが構想力でありまして、それが最高の意味における技術である。さういふ人間の本質的な二元性を一元化しようとする人間の持つてゐる技術、それが芸術の術といふものを持つてゐる本体でなければならぬ。

それは今申しましたやうに人間が作る形である。形式といふ言葉はかうした創造的過程に使ふ言葉であります。どうしても形といふものがなければ芸術は成立たない。それは考へる世界と行動の世界を一つに統合するものであり、ロゴスの世界とパトスの世界を形で統一するものであるといふことになりましてこれが私の結論でありまして、なぜさうかといふことは今までいろいろなところで申したことをお読み頂いたりしてをると思ひますのでそこは今日省くわけであります。

若し芸術が——文芸と芸術は今日のお話では同じことでありまして、文芸といふことは文による芸術、言葉による芸術といふことになります。尤も言葉の芸術といふのは語弊があります。言葉が言葉でなくなつた時、それは言ひ換へれば言葉が実は言葉でなくなる時、次元を廻つてもう一段高い所へよち登つた時に言葉が文芸に参画する、かういふふうに考へるのであります。それから言葉の芸術と申しましたことはさうした註釈が要る。けれどもともかく言葉の芸術である。絵が線の芸術であり、音楽が音や旋律の芸術であるといふ言ひ方をなにか常識的に申しますならば文学は言葉の芸術といふことになりまして、——これからのお話でも芸術といふことと文芸といふことは同義語であるわけでありまして。

そこでさうした芸術即ち文芸といふものを生産して行きますこの過程において、さういふ文芸が目標として考へ、又それが結果であるところのものが形といふ言葉で現はされたも

のであります。今申しましたやうに人間が形を創造するといふことはこの場合文芸を創造するといふことと同じことに帰着するわけであります。随つて形はそれ自身決して一つの理念であつてはならない。理念といふものは今申しましたこの二つの人間の二元的な傾向の一方を承はつてをるものでありまして両方を綜合するものではあり得ない。

ところが形は今申しましたやうにさうした二元的なものを構想力によつて總合統一するものとして存在するのでありますから理念といつたやうな二元的に割れたものではない。形はさうした二元的なあらゆるものを一元に綜合する或る物即ちもつと人間的なものでありますから、人間に、或ひは文化に歴史がある限り歴史を持つて、或ひは人間に社会がある限り社会を持つてゐなければ形とはいへないといふことになるわけであります。これは勿論理念的な面を否定して申上げてをるのではない、理念的な面即ちロゴスのものとパトスのなもの、その二つの總合統一の結果として生れるものでそれが即ち芸術が生れたといふ事なのです。

かういふ、ここでは結論だけ申上げましたやうな私の文芸観によりますと文学は美であつてはならない。美はその一方的なものであるかも知れませんが、決して総合的なものでもあり得ないからであります。かういふのが私の文芸学的方法を考へる、或ひは今日の頂戴しました課題を考へて見る一つの物差し、尺度、基準になるわけであります。

さういふ考へ方で文芸といふものを理解いたしましたならば、さういふ文芸を対象とする学問としてどういふ方法があるか、これは勿論今までの広い意味の万葉学がそれぞれ文芸学的方法を持たなかつたと申上げようとしてをるわけでは決してありませんが、すべての学問がさうでありますやうにわが万葉学も決して完全無欠のものではない。現段階においても万葉学は非常に進んで来て居ります。明治の時代、或ひは真淵の時代、仙覚の時代と、遡つた幾つかの段階を現段階に比べて考へて見ますならば真に隔世の感がある。これは申す迄もないことでもあります。しかしそれかといつて万葉学はこれでいいかといはればこれではいいとはいへないことも申すまでもありません。さうした立場から考へて今日の万葉学にはもつと何と申しませうか、バランスのとれたものにして行く、多少共手薄なところを補つて行くといふことが、考慮されなくてはならないことであるので、さういふ一般的な考へ方からいたしまして、決して今までの万葉学を批判するといふやうな事ではなくて、ただ今日の万葉学が明日に進展して行くための私の見解、それを文芸学的に考へて行かうといふのが今日のお話になるわけであります。

今、「形」に歴史がある、社会があるといふことを申しました。かう申しますと、皆さん方のお考への中には丁度文芸学的方法といふ言葉をお読みになつて、なかば常識的にこれは美に関する何事かを喋るのであらうとお考へになつた、その

考へ方と同じ考へ方から、それは歴史社会学的な方法であつて文芸学的方法とは全く違つたことをここで考へてをるんぢやないかと、かういふやうにお考へになるのではないかと思ひますがさうではありません。私の今申し上げますことはどこまでも文芸学的方法なので唯文芸学的方法の中にもつと歴史的、社会的な見方が取入れられなければならない。取入れられなければ文芸学的方法が厳密な意味で文芸学的方法でなくなる、つまり文芸学的方法を本当に文芸学的方法たらしめるためにはさうした面が余りに手薄である。さうした見方をもつとここに注入しなければ健全な、健康な文芸学的方法といふものを将来に期待することはできないのではないかと考へる次第で、そのところを誤解のないやうにお願ひ申し上げます。

そこで一、二实例を申し上げお分り頂きたい。今まで大分暑苦しいことをまくし立てましたから少し隨筆的なお話をして今までのことをもう少し素直に分つて頂きたいと思ひます。

私、この夏、一寸した学会の用事で金沢へ参りました序でに能登半島の熊木といふところを見に参りました。それは万葉に能登の歌が三首出てをりました、これは今日のお話とは少し離れるかも知れませんが風土といふものの文芸の上には及ばず関連といふやうなものは誠に重要な、これも見方によつては今までのいはゆる歌枕のやうな風土の研究では學問にならないといふことを考へてをるのであります、さうした謂

はば風土文芸学的な一つの仕事といたしまして能登の熊木といふところへ行つて参りました。それは卷の十六に、これもいろいろなところで書いたり、お話ししてをりますので、もう読んだり、聞いたりして頂いてをる方もあるかも知れませんが、能登国の歌三首として三八七八、三八七九、三八八〇の歌が出てをります。

この講演会には予め万葉集を持つて来るやうにといふやうな指示がございましたが皆さんお持ちでございませうか、お持ちでない方がございましたら一寸手を挙げて頂きたいのです……。

ではお持ちでない方は御不自由でも聴いてお考へ頂きたいと思ひますが、今申しました三八七八、三八七九、三八八〇と三首の能登国の歌といふのを読みあげて見ませう。

三八七八番の歌は「梯立の熊來のやらに、新羅斧墜し入れわし、かけてかけて、な泣かしそね、浮き出づるやと見むわし」

三八七九番は「梯立の熊來酒屋に、真罵らる奴わし、誘ひ立て率て來なましを、真罵らる奴わし」「わし」は「よいよい」といふやうなはやし言葉だらうといふことになつてをります。

この三八七八番の歌には短い伝説が左註についてをります。いかにも左註らしい説明でありますがさうした左註を暫く離れてこの歌自体の表現といふやうなものを見てみたいと

存じます。「梯立の熊來のやら」の熊來といふのが私が今度調べに参りましたところで、「熊來のやら」といふのは金沢に多年居られて北陸の万葉の地理を特に調べてをられました鴻巣盛広さんの御研究などによりますと、要するに一つの鴻巣泥海のやうなところを「やら」といつたらしいのであります。「新羅斧」と申しますのは、新羅といふのは当時文化の先進国でありますから新羅何々といへば丁度後世の唐傘、洋傘と同じやうな言ひ方だつたと存じます。その「新羅斧」を熊來の泥海の中に落つこととした。その男に対して「かけてかけて、な泣かしそね」「いいから、いいから、泣かなくてもいいよ」ともう一人の男がいつてゐる。「浮き出づるやと見むわし」「今に浮いて来る、見ておいでよ」これはひやかしてゐますね。ひやかしてゐますが、ひやかされてゐる者と、ひやかしてゐる者の間には非常に親しみがある。親しみといふよりも愛情です。

もう一つ次の歌も一緒に一括して申上げた方がいかも知れませんが、三八七九番の方は「梯立の熊來酒屋に」「酒屋」といつても一杯呑むあの酒屋ではなくて、酒を造るところといふふうに解しませう。熊來に酒を造るところがある。沢山の労働者を雇つてをりませう、酒を造るために……。そこで「真罵らる」「ま」は接頭語でありまして、「真罵らる」は叱られてゐる。奴が叱られてゐる、「奴」といふのは勿論奴隷的な存在で当時奴婢と呼ばれた、酒造の為に使はれていた

労働者で、それが叱られてゐる。そこで「誘ひ立て率て来なましを」「誘ひ立て」は誘つて来るのです。こちらへ来いと誘つて連れて来たいなあ、「まし」は例の条件的な「まし」です。實際は連れて来られないが連れて来てやりたいなあと言つてゐるのです。

酒屋で誰かが叱られてゐる、殴られてゐるかも知れませんが。それで連れて来てやりたいなあと思ふけれども連れて来られない。ああ連れて来てやりたいなあ、と愛情に充ちてぢつとながめてゐるのです。同じ愛情が前の歌にもあります。何かのはずみで新羅斧を墜し入れて泣きさうな顔をしてゐる、それはこの男が自分の仕へてゐる主人から拜借して使つてをつたものらしい。それが泥の渦の中に墜ちてしまつた。その男が泣いてゐる、泣いてゐるのをこの作者は、おい、何を泣いてゐるのだ、今出て来るかも知れんぢやないか、斧なら浮いて来るだらう、とひやかしてをりますが、同じやうなら丁度ひやかされてゐる者が、何をといつて相手を睨みつけるかといふとさうではなくて、さう言はれたことによつて愛情を感じてゐる。ここにあるものはこの作者と相手との間の濫かき愛情なんです。濫かき愛情なんですけれども、その濫かき愛情の在り方は必ずしも万葉集の外の歌人の持つてゐる愛情と同じものではありません。

巻の十七の四〇二二番をお開け頂きたい。この四〇二二番から四〇二九番までの一連の歌は家持が当時越中守でありま

した時に、これは後にある左註で分ることですが、春の出挙によつて諸郡を巡行する時に家持が詠んだ歌で、出挙といふのは地方官の政務の一つであります。家持が巡つた年月ははつきり分りませんが、その前の四〇二〇番が天平二十年の春の正月二十九日であり、次の巻十八の初めが同じく三月二十三日ですから、大体年代順に記録されてゐるものと推定いたしましたして、その間天平二十年の二月から三月の中旬位の間に春の出挙と左註にありますからその間に巡行して詠んだ歌です。

その中で熊來の歌に比較対照して見るのに都合のいい歌を挙げますと四〇二一番です。「雄神河くれなゐにほふ乙女らし葦附取ると瀬に立たすらし」「雄神河」は今の川の事ださうで、私は今度はまだありませんでしたが、「くれなゐにほふ少女らし葦附取ると瀬に立たすらし」、雄神河へ来て見ると、「くれなゐにほふ」ほんのりと向うの方に紅いものが美しく見えてゐる、ははあ、里の少女達が葦附を、葦附といふのは当時のやはり食物です。葦の根元にかたまつてついでゐる、それは今でも食用になるさうであります、その葦附を取るといふので雄神河の瀬のところ立つてをる。「瀬に立たすらし」の「立たす」は尊敬といひますが、これは尊敬といふよりも尊敬の言葉で以て愛に代へるといふ誠に上品な愛情の表現である。葦附を取つてゐる少女どもに對する家持の愛情はこの「雄神河くれなゐにほふ」といふ敘景的な、自然に對

する鑑賞と溶けあつてゐます。葦附を取るといふのは少女にとつては主食を漁ると同じやうな相当ざりぎりの生活で、決して家持が出挙の途中で馬上ゆたかに眺めやつた、さういふ意味の美的なものではなかつたのですけれども、家持はそれにも拘はらずさういふ少女達に對してかういふ愛情を注ぎかけてゐる。この愛情と「梯立の熊來のやらに、新羅斧墜し入れわし、かけてかけて、な泣かしぞね、浮き出づるやと見むわし」又「梯立の熊來酒屋に、真罵らる奴わし、誘ひ立て率て來なましを、真罵らる奴わし」といふ愛情とは非常に素質が違ふ。そこには二つの社会がある。或ひは二つの社会の関連がある。一方には働いてゐる奴、新羅斧を持つて働いてゐる者、それに対して同じやうな生活をしてをる作者と、さういふもの間に交されてゐる愛情の遅しさと申しませうか、さういふものがあると同時に家持には家持らしい、大官人らしい様相を呈した家持の愛情、家持が自分の治めてゐる人民に對する愛情、といつたやうなものがある。

つまり愛情の二つの形がそこにあります。この二つの形はそれぞれの社会といふものを持つてゐる、かうした社会なしにこの二つの愛情を愛情として形成された文芸をわれわれは理解することは非常に困難であり、又さういふ一面的な、さういふ社会的関聯を除けたもの見方は学問的に申しまして決して十分完全ではありません。さういふことを考へて來るといふことが文芸学の一つの形の追究といふことの具体的一

例になるのではないかと思つて私は申上げるわけでありませう。

もう一つ同じやうな例を、折角能登の歌を三つ挙げましたから最後の歌について申しあげて見ますと、「所聞多禰の机の島の小螺をい拾ひ持ち来て、石以ちつつき破り早川に洗ひ濯ぎ辛塩にことと揉み高杯に盛り机に立てて母に奉りつやめづ兒の刀兒父に獻りつやみめづ兒の刀兒」「所聞多禰の机の島」といふのはいろいろ説はありますけれども、過半数の意見に従ひますと、今机島といふ小さな島が熊登灣の熊来に寄つた方にある、その島のことだらうといふことになつてをります。平たい小さな、どのくらゐありませうか、周圍二、三町という程の島でありますが、その机島の小螺を拾つて来て、土地の人によると机島の小螺はおいしい、だからとにかくこの机の島の小螺を拾つて来て、さうして石で以てこつんこつん突き破り、流れの早い小川か何かで洗ひ濯ぎ、辛塩にこつこつと揉み、高杯に盛つて御膳ごしらへをしてお父さんに差し上げましたか、お母さんに差し上げましたか、お上さんよといふのです。この後の方は暫く措きましてこの歌に出てをりますのは小螺に対する愛情です。これは実に生活的なんです。

われわれはどこそこの天婦羅がうまい、どこのお菓子がうまいといつて食べに行きます。さういふうまさぢやないのです。さういふ食物に対する愛情ではなくて、みづから机の島

に行くのですからそれ自身が極めて行動的なのであります。さうして机の島まで櫓を漕いだことと思ひます。お上さんが自身漕いだかも知れませんが、彼氏に漕いでもらつたかも知れません、がとにかくそこに行つて拾つて来て、石で叩いて、川で洗つて、塩をふりかけて、お茶碗に載せて、お膳に盛つて行く、さういふ食物なんです。さういふ生活的裏付を持つてゐる。みづから漁り、みづから洗ひ濯ぎ、みづから料理する、さうした過程そのものが愛情の表現なんです。うまさの表現なんです。

ところが万葉にある食物はいつでもかういふふうなものは限らない。その一例として家持の例を申しました。そのお附合にお父さんを引張り出して来るのが許されずならば巻五の中に家持の父である旅人が大宰帥になり出挙ではなくても管内を巡視して松浦河に行つた時のこと、玉島河で一つのローマンスを創作いたします。巻五、八五三から八六三まで十一首、これは一連の創作であります。これはどうして作られたかといふことは別の問題でありまして、ここで詳しく申上げる暇はありませんがその中に年魚を釣る少女が出て参ります。この少女は非常に現実ばなれのした謂はば歌人の幻想の中の人物ではありますが、しかし同時にこの歌を作らした一つのきつかけとしては現実にこの玉島河には年魚が走つてをりまして、美しい漁師の娘が年魚を釣つてをつたといふことも必ずあつたと思はれます。さういふものが全然なく

して、ここに一連のかうした歌物語ができたと考へるのは不自然だらうと思ひます。

現に私のこの数年前にここへ行つて泊つて参りましたが、川は吉野川に似た景観を持つてゐて、彼が吉野を思ひ出したのも偶然でないと思ひましたが、現にそこでは年魚が沢山取れるのでありまして、季節の關係で参りました時にさういふ光景を直接に見はいたしませんでしたけれども土地の人々に聞いてさういふことを確かめることができました。ただかういふ美しい少女に会ふことができなかったのは非常に残念であります。

旅人のこの一連の歌の中には例へば「漁する海人の児どもと人はいへど見るに知らえぬ貴人の子と」「少女たちはいや私は漁師なんでございますよといふけれども見てゐると決してさうではありませんよ、あなたはどつかのお嬢さんでせう」「玉島のこの川上に家はあれど君を耻しみ頭さすありき」「この川上に家があるけれどもお恥かしくて申上げられませんでしたわ」と答へたりしてゐる。又旅人が扮するところの男主人公の方が「松浦河河の瀬光り年魚釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ」「河の瀬が波で光つてゐます。その光つてゐるところで私の愛する妹が年魚を釣るといふので立つてゐらつしやる、あつ、裳裾が濡れます」といふ歌です。尤もこの歌の主人公の乙女に対する態度は「遠つ人松浦の河に若年魚釣る妹が袂を我こそ巻かめ」と段々露骨になつては参ります

が、とにかくこの乙女は終始年魚を釣つてゐるのです。年魚は申すまでもなく食糧であります、食べるためにこそ年魚は釣られてゐる、しかし一体これは果して生活かどうか。どうもかうした現実ばなれのした年魚の世界か、仙人の世界か、それともローマンスの世界か、そんなところで年魚がびかびかと光つてゐるのです。その年魚を愛することは釣つてゐる少女を愛することでもありませうし、年魚は一つの文芸的な形でありまして、旅人が少女に対する愛情を文芸的構想力で以て形に捉へて行く、そのことにおいては机の島の小螺と變りない。ここでも愛情といふものが小螺といふ形にまで形成されてゐるといふことにおいては同じであります、その内容、愛情そのものが何といふ違いでありませう。

丁度前の新羅斧を墜し入れたり、酒屋の中で叱られてゐる愛情と、「雄神河くれなゐにほふ少女らし葦取ると瀬に立たすらし」の愛情、家持の愛情とが非常に違つてゐると同じやうに違つてゐる、その意味に於てはそこにある二つの形は全く違つた形である。文芸的に申しますと違つた構想力、この違つた構想力は二つの違つた社会といふものを予想するものでなければ、二つの社会を含めて考へるのしなければ解明することが出来ない。

単に家持の個性美、旅人の個性美といつたやうな美の理念の上に立つて個性を考へるだけでは解明する事が少なくとも困難である。だからかうした社会的観点に重点を置くといふ

事が今日の文芸学的研究法の弱点を補ふ所以ではなからうかといふのが私の申し上げたいところであります。

最初に少々理論的に申上げ次に実例で申上げた事もつまりは此の事を少しでもよく分つて頂きたいために外ならなかつたのです。(廿七年八月、万葉夏季大学に於て) (終)

後記

御覧の通りこの稿は講演の速記です。元来私は話すことと書くことは全然別ものと考へてゐるので、講演で原稿を読んだ経験はなく、又講演の速記をそのまま読み物に切りかへた経験も持ちません。今度も最初は全部書き物にあらためる積りで本誌に掲載をお引受けしたのですが、この速記が非常によく出来てゐたためと、締切りの切迫のために、つい今までに経験したことのない、速記録を直すだけでそのまま掲載することにしてしまひましたが、しかし私のこの生れてはじめての経験はやはりこのやうに失敗に終りました。

そして速記といふものは忠実であればあるほどそのまま読む文章に直すことが六かしいといふことをしみじみ悟りました。読者ならびに編集の方々に深くお詫び申上げます。

×

×

×

萬葉大和・近江研究旅行

万葉愛好者にとつて大和は正に聖地であります。上代文学会は創立第二年度の事業として本会会員のためこの古蹟の詳しい探訪を行ひ、併せて数百の美術品の鑑賞を行ひます。宿舎・乗り物の関係上、この度は参加者を本会会員に限り、且つ先着申込者三十名に限ります。直に左記連絡所宛葉書で御申込下さい。御申込順に参加証を返送します。参加証御受取の上、即日旅費をお送り下さい。(旅費は一切返戻をお断りしますから、故障の方は他の参加者を探して参加証をお譲り下さい)

時……八月九日・十日・十一日・十二日(八月八日夜二時東京出発、九日朝八時半奈良着、十二日午後二時頃法隆寺にて解散)

但、希望者は、十二日京都一泊、十三日比叡山登山、近江大津宮、幸崎等見学解散。

目的……大和地方の万葉遺蹟探訪、美術見学。——この目的の

為、往訪する土地は、

奈良・佐紀・布留川・石上神宮・三輪山・大和三山・飛鳥京・藤原京・雷丘・飛鳥川流域・橿原神宮・壺坂寺附近・吉野山・吉野離宮・法隆寺・薬師寺・唐招提寺・東大寺・興福寺・元興寺・河原寺・橘寺・並びに万葉植物園

(以上、地理・美術品・万葉植物の専門の諸先生が参加、懇切に説明されます)

費用……三千五百円(宿泊料、大和遊覧バス電車代、寺社拜

観料、講師謝礼、プリント代外諸雑費)

右は汽車賃を含みませんから、切符は各自お求め下さい。

(近江送同行者は各一千円増加)

連絡所……詳しくは「東京都千代田区神田、日本大学国文学研究室内万葉大和研究会」宛、郵券拾円封入御問合せ下さい。